

同窓会報

第7号
 社団法人
 上田高等学校同窓会
 昭和48年3月25日発行
 印刷所
 田辺印刷株式会社

西沢県知事に陳情

運動場敷地購入を

昭和四十八年三月十六日午後二時より上田高校のグラウンド敷地が狭小で、授業に支障ありと、小山一平上田市長(第31期)、柳沢文秋上田高校同窓会長(第27期)、小林軍治上田高校PTA会長(第37期)岩下上田高校長(第29期)が県庁に出頭し、西沢県知事、小林総務部長、小松教育長、尾崎県会議長地元選出の羽田、山岸、西川、中村の五県議員に対し母袋忠右衛門副議長(第32期)の案内で陳情を行なった。既に母袋、柳沢両氏によって小松教育長に非公式に打診されていたので陳情の成果が上

陳情書

昭和四十八年三月十六日
 長野県上田高等学校改築期成同盟会長 小山一平
 同副会長 社団法人上田高等学校同窓会理事長 柳沢文秋
 同副会長 長野県上田高等学校PTA会長 小林軍治

同窓会幹事会開催 運動場と総会を議題に

四十八年三月九日午後五時三〇分より同窓会館で、四十八年度幹事会が開催され、各期の幹事が続々来館、五十二名に達した。冒頭柳沢理事長が幹事会招集の趣旨を述べ、続いて規約により細田延一郎(第14期)氏を議長に選出し、議案審議に入った。

第一号議案「運動場敷地購入の件」について柳沢理事長が説明した。昭和四十六年創立七十周年記念会で、名簿作成と校舎改築が議決され、名簿発行を昨年完成したが、他方校舎改築について理事会は慎重に審議を進め、文部省規準高校敷地より算定し、上田高校は三万坪の用地が必要であるとし、移転改築の線で、上田近郊の用地を検討し、染谷台に三万坪の敷地を発見し、柳沢利一郎(第33期)の幹旋で地主との交渉も成立したが、最終段階で県教育委員会が高校敷地は一万八千坪を限度と提案して来たため、移転改築の線は放棄することにした。しかし現地改築では校庭が余りに狭小なので、五千坪の運動場敷地を上田高校の近くに購入出来る目途が出来たので、幹事会の決議を経て、この獲得の陳情をしたいと累々説明され、場所の説明を母袋県議員が当たり満場一致、五千坪の運動場の購入

昭和四十七年度総会

講師 倉沢 剛氏

四十七年五月二十一日(日曜)午後一時より同窓会館で四十七年度総会を開催、田中豊雄(第36回)氏制作の映画上映後、総会に入り「昭和四十六年度事業報告及び決算承認の件」、「昭和四十七年度事業計画並びに予算承認の件」、同窓会奨学資金決算承認の件、監事の補選の件を承認し、二時三十分より講演に移った。講師は専修大学

確保していただきたく、格別の御高配を賜りますようお願いいたします。(以上陳情書全文)

教授倉沢剛(第20回)氏が「日本の教育」と題し、学士賞授賞内容を基礎として熱弁をふるわれた。引続いて信毎文化賞を受賞された西沢重明(第10回)、熱四等教育功労賞を受賞された土屋賢郎(第18回)学士院賞を受賞された倉沢剛の三氏の祝賀会を兼ねて同窓会懇親会が開催された。この日長野高校同窓会連合会も開催された。

名簿残部少なし

七十周年記念事業として編纂した同窓会名簿は好評で、四千部発行した処、希望者が続出した。なお残り三百部がありますので、希望者は二千円(送料共)を御送り下さい。名簿は仲々発行出来ませんので是非共お求め下さい。

同窓会賞授与

昭和四十八年度同窓会賞は若下校長の推せんを、同窓会理事会で審査し、定時制岩城英雄君に授与することに決定、三月七日定時制子

板金プレスの近代化を誇る

取引先 松下電工・富士通
 三菱電機・津上・キャノン

コヒラ工業株式会社

本社工場 長野県上田市大屋353
 TEL02682-5-1311

東部工場 長野県小県郡東部町滋野
 TEL02686-2-1125

専務取締役 手塚 伸(51回)
 常務取締役 手塚 宏(52回)

安全とサービスを保って20年



営業品目 LPG・配管・器具・冷暖房工事・防災器具

長野プロパンガス株式会社

本社上田店 上田市大字国分542番地
 TEL(02682)25518(代)
 松本支店 松本市美須々7の1番地
 TEL(32)4652(代)
 諏訪支店 諏訪市大字四賀757番地
 TEL(2)4353
 広丘工場 塩尻市広丘野村
 TEL(2)0672
 長野営業所 長野市中越
 TEL(43)5307

二十七日期上中会

公園内富貴で開催

昭和四十七年七月八日料亭富貴に於いて二十四名の参加を得て、極めて和気藹々、哄笑、爆笑の盛況裡に無事終了した。なお今後は年一回催すことを会員賛成の下に決定した。参加者名次の通り。

川上勇(福島県より)倉沢文男(新潟市より)樋口達雄(厚木市より)以下県内、石井補人、太田元、大塚貞通、小野恒男、小出万悟、合津二三、清水謙吾、関口武男、竹内喜巳人、竹内信次、田中幸雄、中島睦治、成田忠雄、西沢軍平、西沢聡一郎、平尾幸雄、細川俊雄、堀内静生、安田勇、山崎實録、松井照好

なお、この他出席通知の後、緊急

三二一会例会

二月十日(土)本年度の例会を別所温泉玉屋旅館(同級生山極真平君経営)で四十五名の多数が出席して盛大に開催されました。

本年は特に大阪、東京、水戸、群馬、富山等の他県から十数名が参加し、四十年振り顔に顔をみせた者七名もあり、昔話に一夜を語りあかしました。この会は大福帳の出席名簿がありまして、毎年出席者は筆で署名することになっており、最後に残った者が大福帳をもちょうこことになっております。

東京支部の例会は毎年十一月に行っております。(若林山岸)

五十周年大会開催

23期生の近況報告

二月十八日教育会館に滝沢武夫、滝沢万二、香山順三、小林純造、荒野進年、中村加治馬及び小諸から駆けつけた桑原周君等が集まり卒業五十周年大会開催について協議し会期は四月二十一日・二十二日、場所は別所柏屋別館、依田誠先生御招待、二十一日午後二時より物故者四十余名の冥福を祈るため北向観音にて同期の松代西楽寺齋堂覚師にも導師となつてもらい法要を営むことを決めた。

最近数年間の二十三回同期会の動きを示すと四十五年一月万花莊に滝沢武夫君の商議会頭就任を祝つて二十三名参加、同年十月同窓会の後「やぶ」で十六名会合したその時東京からの参加も多数いたので其後東京の仲間も合同でやることにし早速四十六年三月銀座スターで大森君が中心となり上田からも七名参加し十八名が集うた。昨年宮入、松田両氏の世話で上山田ホテル八幡で東京から八名参

四八回現況

六名(以上小出、西沢、松井記)我々48回卒業同年会を四八(ヨソバチ)会という。たまたま本年は昭和48年、誠にエンギも良い。昭和中は省語でスーパ、横文字にすればSUPER、決してスーパーマン揃いというつもりはないがなかなか多士済々である。教育勅

卒業満五十年記念会

第二十四回同期生

大正十四年三月卒業のこの仲間は今で満五十年を迎えることになり、年令も六十五才を過ぎて、社会の第一線を退いて、余生を送る者が多くなつて、デモクラシの思想が盛んになり、軍縮が行われ、職業軍人が軽蔑される雰囲気の中、育つたので、社会主義の考え方を持って、ひどい圧迫を受けての、バラエティーに富んだ存在であった。声楽家の塩正吉、早稲田大学教授榎山欽四郎、山梨大学の太田道雄、茨城大学の小林建道等教官関係、富岡秀、安藤孝、笠原正己、依田勉夫、流沢中、小林

苦朗会記

第五十三期卒業生で上田存住の者十四名で構成されている。毎月九日、市内の料亭に参集、親睦無尽を行い幾莫かの貯金をしながら日々のウサ晴らしをしている。同業者がいらない為かチームワークの良さを看板に、発会以来十年の歴史を数えるに至り、本年二月、東南アジア周遊旅行を先行した。タイ、マレーシア、インドネシアと南国の真夏の太陽の中を突きの満と共に、新たな友情を育みながら一週間浮き世の煩わしさを離れて、このツアーは又となつて刺激剤となつて会員一人一人の胸に深く焼きついていく。日本の良さを再発見し、日本人の偉大さを肌で感じたことの意義の深さはこれからの我々の日常生活にどのように影響し生活感覚をどのように

一六会のこと

一六会と呼ばれる我々四十一期の同級会は毎年一月二日に開かれる秋頃幹事が全員に通知を出す約半数の諸君から近況報告を兼ねた出欠の返事が来る。今年もこの会に出る事を生かす甲斐に一年中働いている(T君の返事より)。熱心な同級会きちが諸君の熱情にさ、えられ、当時の担任の安間先生と若下現校長先生をお招きし、三十五名出席して卒業後三十二年記念の会を開いた。安間先生と校長先生の御挨拶の後、校長先生からは、昨年我々四十一期有志から学校へ放送設備を寄贈した事に対する謝辞があり、宴に移った。はじめは顔のわからなかつた者も暫くするとお互いに昔の姿に戻り、約三時間の楽しい会を終え、校歌、応援歌と知れるかきりを歌いつくし、家路につく者、二次会に流れる者とそれぞれに夜の町へ散って行った。(甲田英久記)

レジャーパーク
株式会社 信州ガーデン
郊外レストラン 信州ガーデン
1フロア30レーン 信州ガーデンボール
特産・花木盆栽 信州アラワガーデン
代表取締役 坂下和三(47回)
東部町加沢 TEL02686 21161

ハムに魂を入れて
30有余年
信州ハム
専務取締役 久保忠夫(第44期卒)
本社 上田市天神2-3-13 TEL(2)8686

獅子会を結成す

上中四十四回卒業生

上中44回(五卒)卒業生は四十七年十一月二十五日上山田温泉亀屋本店で同窓会を開催した。地元在住者は勿論のこと、遠隔地より参会する者も多く、卒業後二十数年の再会など、若き日の上中時代の再現が見られ、酒盃を重ねる程に、懐しさが倍加し、肩を組んでの歌、肩をたたき合つての語らいの中に感激の一ときを過ぎた。当日決定の会則次の通り

- 一、本会は獅子会と称す
- 一、本部を上田市に置く
- 一、県内外に支部を置き、連絡係を置く
- 一、会費は年額一〇〇〇円とする

(四十八年度より納入、八十二銀行上田支店口座番号二七七一四二五に振込まれたし。

毎月の例会は四×四の十六日に行なう。出席は上田市中央一―一七サカモト内獅子会事務所(電②六八四八)又は上田市昭楽局小林重次郎(電②〇〇九六)宛。亀屋本店に於ける総会出席者は次の通り。

- 上野都夫 両角辰文 内藤 辰三
- 田中幸男 飯島 暢 西原 昭三
- 竹沢久和 宮本久吉 松岡昭三郎
- 望月正樹 滝沢善治 小山厚三郎
- 横岡義貴 太田保昭 小林富次郎
- 田中洋三 横関徳二 田中 昭一

恩師を迎えて

四四同期窓会

滝沢恵天 山浦 弘 山田 昭一
松崎 功 土山康弘 竹内 昭二
齊藤辰二 小林元享 花岡 貞寿
佐藤忠一 小林真秀 青木弥之輔
伊藤義久 池田忠治 阪本 典弥
浅川 寛 堀内茂男 高津 正督
(尾和)

なお卒業後二十七年にして交通事故のため身体不自由で生活されている田中幸男君に対し互助会を結成することを決定した。

四十四回四卒(昭和十六年四月入学、二十三年三月卒業)は本年一月二日に市内末広町上田温泉で竹内敬太郎、宮坂仁吾、山極真平、久保良男、中村六男、馬場正次の六名の恩師のご出席を得て総勢六十七名が一室に会し、懐旧談に時の経つのも忘れる楽しいひとときを過ごし、秋玲瓏の空響てゆうべ太郎の嶺高し……の大合唱で再会を約して別れました。

なお四十四回四卒は毎年一月二日に同年会を行なっています。

青々会だより

第三十九期卒

「いつまでも青々として、若さを忘れず、年と共に盛んなり」の意に違わず、青々会も回を重ねること二十回。

今年は、川西地区が当番にあたり、さる二月十日、別所温泉上松屋旅館に於て、現在日本漢詩界のナンバーワン 笠井南村先生(現山梨学院大教授)・母校の第十三代校長 清水次郎先生(現殖生高)ものかわと馳下りし田中浩太郎君(日本電々公社資料局長)・久保田勇君(防衛庁一等海佐)・堀内普君(流通経済研究所長)をふくめ、参加者総勢四十名。

- 古き
- くめ、参加者総勢四十名。

卒業五〇周年を迎えた

大士会と二一一会

「成人病とこれからの健康管理について」の講演をきく。われわれ三十九期生も、歳五十五天命を知る年代となったので、おのれの健康管理に充分留意し、住みよい社会建設のため力を致すことが、取りも直さず事故同級生の

追供となり、青々会の発展にもつなぐるものと信じて疑わない。

青々会役員
会長 西沢 弥八
副会長 小林 睦男
幹事 山極 正之
(文責)当番幹事山極 正之

第三〇期同窓大会

上山田温泉で

昨秋上中卒業五〇周年を記念して地元の二一一会と東京大士会とが合同して錦秋の故郷別所温泉で同期会を催し二十三名が集まって互に旧情を温めたがこれは関東支部「うえた」にも山浦君が概要を報道したとおりである。

思えば二一一生は大正十一年に卒業。昭和七年に満一〇年を記念して万花荘で二一一会を結成、東京勢は大士会を作り、発足以来一年一回以上開くことになっている。戦時中でやれないこともあったがよく続いている。三十七年には、四〇年を祝し公園内明倫堂で、今はじき小泉清先生を迎えて開いた。

四三年には関東支部の呼びかけがあつて二一、二四の四期生合同の会を柏原別荘で開き六〇名が集まつた。そして昨秋、私達は五〇周年を祝つた。卒業当時一〇八名現存七十一名、死亡三十八名である。

同期会開催の時期は決っていないが例えば同期の花松平久久氏の政界や時事問題、海外旅行者の時の土産折、東京大士会の諸氏来幹事は永井大二。

- 尾台三吉、曲尾 清、成沢省三、渡辺剛夫、原 相模、塚田今朝則
- 青木 固、多田忠正、永井大二、細田公紀
- 同窓会大会は昭和四十八年四月七日、八日上山田温泉ホテルで開催の予定である。

事務局だより

◇昨年二月同窓会名簿を七十周年記念事業として発行したが、好評で、四千部発行が、残り三百部となつてしましました。御希望の方は二千元(送料を含む)を御送り下さい。

振替口座
長野七五二八番

◇名簿は正確でなければ役立たない。住所変更の節は是非共御連絡を忘れないう下さい。

◇同窓会館は学校側ではホームルーム(18回)学年会、新入生歓迎会、PTA総会、春夏の合宿等使用の半数近くを使用、同窓会では総会、理事会、幹事会を、一般には各会社の総会、研究会などに貸与しているが、上田市合同花展が開催されたり、同窓会員の結婚式が23組も挙行されている。

◇同窓会館の維持は人件費、物件費の上昇で大変だが、東洋信託債の購入者が増加し、その利子分の中から自動的に八万円程の維持費が振込れて来るようになった。維持費は年額五百円だが、これが育成資金や会館維持費になることをお忘れなく。

◇五月の総会には昨年の叙勲者 勲四等旭日大受章 坂井修一 勲五等双光旭日章 西沢平重 勲二等旭日重光章 長井盛至の三氏に春の叙勲者を加えて招待し、祝賀会を行なう。

総会に出てお互の健康を祝し合うことも必要ではないか。

ハンドバック・貴金属
宝石・アクセサリ
エリート

上田・松尾町 TEL②1643
山口善吉(44回)

海外旅行のカバンは
ニューバックセンター 甲州屋

上田中央一番街 TEL②0534
休日②4035

社長 山田 太郎 (27回)
専務 山田 豊 (59回)

信州人の長所と短所

第14回 天田 六郎

私は信州に生れ、上田中学のころ厄介になったことになっているが、上中時代を回顧すれば、にがに思ひ出ばかりで、同窓会々員を名乗ることなど申訳ないと思つてゐる。然し、信州の美しい自然をこよなく愛することにおいては、人後に落ちない積りである。その美しい自然が今急速に破壊されつゝあるしかもそれには、信州人の特徴的な性格が大に関係しているように私は思ふのだ。

しがたない世過ぎることから、方々を流浪している間に、長所も短所もかなりはつきりさせる信州人の性向には、私も度々思い当たらせられることがあつた。この辺のことは、故郷の中に生活しておられる信州人の方々に、案外見逃されてゐると思ふ。そこで、同窓会報の紙面をかりて、その辺のことどもを少し書いて見たい。

私は古稀に達すると共に、なりわいのたすきに連がる世俗の煩わしさから逃れ、半世紀ぶりで生れ故郷に近い善光寺さんのお膝元に仮寓を求めて四年余りを過した。その間真先に気がなつたのは、信州人のしやべる日常言葉の甚しく粗野で乱暴で、相手方の神経には全く無関心であることであつた。あるいは、言葉をくずして親しみを示そうとでもするかと思つた

が、そうでもない。それは信州人に共通する自我意識が強く、周囲に思ひ遣りを持つテリカシーが足りないことに、すべて通ずるもののように思はれて来た。信州人がおのれが常住する周辺の自然美がほとんど破壊されていくのに、ほとんど無関心であることにも当然通じてゐると思ふ。

長野に来た当座、善光寺大門前の中央通りに面した個人経営の老舗の主人など恐ろしく乱暴な言葉づかいをして、ほとんど客扱いを知らない如くであつたのに痛く驚かされた私は、その辺の感想を拙文に綴つて、長野産業会館内に発行所を持つた、信濃路。と言ふ雑誌に掲載して戴いた処、若干の反響があつたところから察すると、信州の住人の中にも（他県人であるか、根つからの信州人であるかは不明であつたが）私と思ひを等しくする人々が必ずしも絶無とは言へないと思つたことであつた。

信州人は古くから質実剛健とか独立不羈とか、不屈な開拓精神の気性、旺盛な向学心とか等々と賞讃されて来た。ところが、それらの性格は封建時代長く続いて来た貧寒たる信州の農村生活の中から培われて来たものではないかと思はれる。例えば碓氷峠を境にし

た関東側に比較した信州側では、山地に挟まれた小狭い田圃や、小石だらけの畑地が断続しているのに反して、関東側には、小石など雑らない見るからに肥沃な広々とした田畑が続く田園風景が、目を樂しませてくれたものであつた。そんな信州の貧寒たる風土が、その土着人の特徴的な性格の基盤となつたのであろうか。そのことは信州人に共通する短所と言へる特徴を観れば理解できるやうだ。信州人は、負け嫌いで、理屈っぽく議論すきで、いく分排他的で融通がきかず、融和性に乏しいと評されて来たが、それらの性向は、彼らの長所の裏返しのようなものではないだらうか。

県内の農業は貧寒なものであつたが、然し神さまは公平なもので信州の風土の中に、世界に誇つてよい自然美の景観を賦与したのでこれは人間たち自身で壊さない限り、その美しさを増しこそすれ決して損耗することのない貴重な天与の財産なのだ。長野県の県歌という「信濃の国は十州に」云々の歌詞（いかにも理屈っぽい信州人の歌らしくて、私は余り好きではないが）の中にも、信州の山水の自然美が詠い尽くされている。他県人が、信州の不思議なと言ふのをよく耳にしたことがあつたが、その中で、今も心に残るのに「大寺あれど、信心なし」「教育界を誇つても、真の教育を知らず」といふのがあつた。善光寺さんは日本中に知られた古刹であるが、お坊さんたちは大方観光会

社の番頭が客引きみたいになつてゐるので全国から集まる参詣人も多くは、国宝の本堂前で写真を撮れば早々に最寄りの温泉街に泊りに行つてしまふ。

長野県は、明治の帝國教育會時代の指導者辻、沢柳高巨頭を出しまた大正時代一頃の東京市の中等学校々長の間に、信州閥を築いた程の教育界と称されたものだ。ところが、仏さまの慈悲も、教育の功德も、信州人の短所を矯正する力はないと見え、今日依然として到るところに自我中心の小理屈が横行し、公益無視・私利先行の「開発」が闊歩している。天帝が信州に恵んで下さつた自然美は、今や産業開発とか観光開発とかお題目の許で、急速に破壊されつつあるのだ。一旦破壊されたら永久に再建が不可能となる自然美という天与の宝は、本来子々孫々に引継がれて行くべきものであるのに、目前の私利に眩惑されて後は「死の野」となれ。不毛の山」となれといった調子は何ともしたことであらうか。

た関東側に比較した信州側では、山地に挟まれた小狭い田圃や、小石だらけの畑地が断続しているのに反して、関東側には、小石など雑らない見るからに肥沃な広々とした田畑が続く田園風景が、目を樂しませてくれたものであつた。そんな信州の貧寒たる風土が、その土着人の特徴的な性格の基盤となつたのであろうか。そのことは信州人に共通する短所と言へる特徴を観れば理解できるやうだ。信州人は、負け嫌いで、理屈っぽく議論すきで、いく分排他的で融通がきかず、融和性に乏しいと評されて来たが、それらの性向は、彼らの長所の裏返しのようなものではないだらうか。

県内の農業は貧寒なものであつたが、然し神さまは公平なもので信州の風土の中に、世界に誇つてよい自然美の景観を賦与したのでこれは人間たち自身で壊さない限り、その美しさを増しこそすれ決して損耗することのない貴重な天与の財産なのだ。長野県の県歌という「信濃の国は十州に」云々の歌詞（いかにも理屈っぽい信州人の歌らしくて、私は余り好きではないが）の中にも、信州の山水の自然美が詠い尽くされている。他県人が、信州の不思議なと言ふのをよく耳にしたことがあつたが、その中で、今も心に残るのに「大寺あれど、信心なし」「教育界を誇つても、真の教育を知らず」といふのがあつた。善光寺さんは日本中に知られた古刹であるが、お坊さんたちは大方観光会

社の番頭が客引きみたいになつてゐるので全国から集まる参詣人も多くは、国宝の本堂前で写真を撮れば早々に最寄りの温泉街に泊りに行つてしまふ。

長野県は、明治の帝國教育會時代の指導者辻、沢柳高巨頭を出しまた大正時代一頃の東京市の中等学校々長の間に、信州閥を築いた程の教育界と称されたものだ。ところが、仏さまの慈悲も、教育の功德も、信州人の短所を矯正する力はないと見え、今日依然として到るところに自我中心の小理屈が横行し、公益無視・私利先行の「開発」が闊歩している。天帝が信州に恵んで下さつた自然美は、今や産業開発とか観光開発とかお題目の許で、急速に破壊されつつあるのだ。一旦破壊されたら永久に再建が不可能となる自然美という天与の宝は、本来子々孫々に引継がれて行くべきものであるのに、目前の私利に眩惑されて後は「死の野」となれ。不毛の山」となれといった調子は何ともしたことであらうか。

信州人には開発に必要な大資本の持ち合せがないので、現に信州の自然美破壊に憂を振つてゐるのは、ほとんど他県人の不動産屋や観光会社などであらうが、信州人はおのれの土地を高値で買取して行く他県資本家の侵略に迎合して時に団体的圧力まで行使して、彼らの自然美破壊を補助してゐるのだ。

試みに長野県の地図を開けば、県内到處に国立や国定の自然公園がある。信州が如何に自然美に恵まれてゐるかを語るものであろう。然し、それらの自然公園の周辺には、必ずといってよいほど、パードライン、スカイライン、ウイナスライン（ロープウェイもこの範囲に入る）等々、舌を噛みそうな片かな名前の有料道路が建設されてゐる。謂うところの観光道路と申すけものである。これらの道路は、山や高原の景観の最も美しい線を縫うようにして緑を伐り倒し、山肌を崩して建設されてゐる。長野にもお多聞に洩れず、飯綱高原を貫いて戸隠に通ずるパードラインと呼ぶ有料道路がある。善光寺の後方に並ぶ、大峰山・地付山の風致・禁猟地区を抜ける自動車道路であるが、この道路のお蔭で、風致区山の斜面は方々に醜い砂岩の肌を露出し、禁猟区というのに小鳥など非常に少なくなつてゐる。

極最近のことだが、県中央部の美ヶ原から霧ヶ峰に通ずるウイナスラインとかの観光道路延長計画をめぐつて、自然美保存派と観光開発促進派とが、はげしく対立して抗争していることが報道された。奇妙なことに、保存派は仙台山出身の大石環境庁長官に後援された他県出身者が多いと思はれる文化人団体であるのに対し、「開発派」は農協などに象徴される土着人グループである事実だ。霧ヶ峰山麓の農協が国定公園の指定解除の請願にやっきになつてゐる由であるが、こういう話を聞くと、封建時代の長い間の誅求に苦しめら

れて来た先人の血を引く土地の人々が、第二次世界大戦後の農地解放で浮び上がつて農協役員にでもなつてゐるやうな人々のエゲツなさを感じられて何とも哀れである。信州の観光開発が積極化したのは、左まで古くもない戦後のことと思つたが、「水明」を誇つた県内に汚染が甚しくなつてゐる。「山頂までハイヒールで登山が楽しめる」と言つた馬鹿／＼しい標語のお蔭で、行楽客が所きらわす捨てるとごみ屑や排泄物にけがされ南北に長いその山麓一帯の環境汚染は今や目を追つて甚しくなりつつある。藝科高原の美しい人造湖ですでに臭い溜池と化し、下方諏訪湖や天竜川までも甚しく汚濁されている。藤村が甘美な詩歌で我々少年時代の詩情の目を開かせてくれた千曲川も、上流の「古城のほとり」まで、最早毒など住めなくなつてゐるやうだ。

最近環境庁が公害白書を發表した日本列島を取り巻く海や、全国土の河川湖沼が如何に汚染が甚しく日本全体を覆う大気が何のようになつてゐるかを詳述して、日本全土が急速に人間の住めない「死の列島」にならうとしてゐるやうな警告警報を發したということが、ジャーナリズムでもやましく報道された。

このやうな状況は、第二次世界大戦終結以来の日本人の生活意識やその態度が激変したことに主因

してゐると思ふ。戦前の強い抑圧の中から、戦後俄かに解放された反動で自由やら人権やらを一方的に強く主張することに押されて、謙虚さも、思ひ遣りも知らない戦後の日本人は、自己主張だけが野放図になつてゐるやうだ。殊に所得倍増策が強力に推進されてからの日本人は、ウェニア文化に眩惑されたエノミツク・アニマル化してしまつたやうだ。この頃海外でよく見られる「日本人海外旅行団」の中でも、胴巻きに部厚い札束をしのばせたやうなノーキーの且那方の中には、アニマル化してしまつたやうだ。そんなノーキーの且那方に信州人が含まれてゐると言つてゐる訳では決してないが、開発によって自然美を破壊する暴挙を補助するかの人は、上記の且那方と余り違つてゐない。

我が愛する信州の自然美が急速に破壊されつつある際、日本々々の真中に、あたかもヨーロッパのアジアのヒマラヤや高原のように、清明玲瓏（れいろう）な山河の自然美を神さまから賦与されたせめて信州だけでも「開発」の魔手から守り通す途はないものかと、私は日夜思ひわすらう今日この頃である。

筆者住所
東京都分府市やき台団地
三九一〇四